

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：22304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25463314

研究課題名(和文) 看護学実習における自律的学習推進システムの完成と普及 - 問題自己診断尺度を加えて -

研究課題名(英文) Development and spread of a supporting system for nursing students' autonomous study in nursing clinical practicum

研究代表者

山下 暢子 (Yamashita, Nobuko)

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授

研究者番号：30279632

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、看護学実習中の学生の自律的学習を推進するシステムを開発することである。本研究は、看護学実習中の学生が直面する問題を質的帰納的に解明し、これを基盤に看護学生のための問題自己診断尺度を開発した。また、看護学実習中の学生が直面しやすい問題と学習の進行度、学生の発達段階の関係を明らかにした。これらの成果を統合し開発する看護学実習における自律的学習推進システムは、学生が直面する問題とその解決の方向性を見だし、学習を改善していくことに役立つ。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop of a supporting system for nursing students' autonomous study in nursing clinical practicum. The problems nursing students' encountered during nursing clinical practicum were explored by qualitative and inductive method. And a self-evaluation scale of problems during nursing clinical practicum for nursing students was developed. Moreover, the characteristic problems were clarified according to the progress of their learning level, their developmental stage. Integrating these research findings leads the development of a supporting system for nursing students' autonomous study in nursing clinical practicum. This system is useful to find the problems nursing students' encountered and the direction of their solution by nursing students. And the system supports improvement of their study.

研究分野：看護教育学

キーワード：看護教育学 看護学実習 看護学生 自律的学習 問題自己診断尺度

1. 研究開始当初の背景

2013年、第2期教育振興基本計画が閣議決定され、学生の課題探求能力修得の支援は、わが国の高等教育の重要課題であると明言された。課題探求能力とは、自らの課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断をくだせる力（閣議決定、2013）である。このような、学生が自らの課題を探求し、その課題の対策を自ら判断する能力の修得は、知識伝達や注入中心の教育のみでは実現が難しい（中央教育審議会、2012）。学生が主体的に課題を発見し解を見いだすような自律的学習によってのみ実現する。

この状況は、看護学教育にとっても例外ではない。保健医療の変化に対応し続けるために、生涯継続して自己研鑽を続ける人材の育成が求められている（日本看護系大学協議会、2009）。また専門職は、その充足すべき1条件に「理論的知識に基づいた技術を必要とし、その獲得のために専門化された長期間に渡る教育訓練が必要」を持つ（天野、1972）。この充足に向けては、看護職者が看護職である限り、発展し続ける看護学の知識や技術に立ち遅れることのないよう、自律的に学習を継続してゆかねばならない。

看護学実習は、看護学教育最大の特徴的な授業である。この授業に取り組む学生の自律的学習を支援するためには、学生の看護実践能力修得に加え、学生が看護学実習中の学習状況を自己評価し、次の学習の改善に繋げられるような支援が必要である。

そこで研究代表者らは、まず第I期として、学生が看護学実習中の学習状況を「行動」と「経験」両側から自己評価するための「看護学実習中の学習状況自己評価システム」を開発した。

このシステムは、看護学実習中の「学習状況」の自己評価を可能にした。しかし、看護学実習中の学生が自律的に学習を推進していくには、これだけでは限界があった。学生が看護学実習中に直面する「問題」の解決に向けた学習の方向性を明確化しながら、学習を進めるためには、まず、直面している「問題」を自覚できる支援が必要であった。

そこで、本研究は、学生がその時直面している問題を自己診断する尺度を開発して看護学実習中の「学習状況」自己評価システムへ統合し、看護学実習における自律的学習推進システムの完成を旨とすることとした。

【引用文献】

- ・閣議決定(2013)：第2期教育振興基本計画、1-79.
- ・中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学

び続け、主体的に考える力を育成する大学～、
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afilefile/2012/10/04/1325048_1.pdf, 2012.

- ・日本看護系大学協議会：看護学教育に関する見解(声明)、2009.
- ・天野正子：看護婦の労働と意識—半専門職の専門職化に関する事例研究—、日本社会学会社会評論、22(3)、330-349、1972.

2. 研究の目的

本研究の目的は、看護学実習中の学生が直面している「問題」とその時の「学習状況」を自己評価し、問題解決に向けて自律的に学習を進めるための「看護学実習における自律的学習推進システム」を完成し普及することである。

3. 研究の方法

研究目的の達成に向けて、以下の4段階を経た。

(1) 第1段階：看護学実習中の学生が直面する問題の明確化

①研究対象者：看護基礎教育課程に在籍し、看護学実習に取り組んだ経験をもち、かつ研究の参加に同意の得られた学生とした。

②測定用具：看護学実習中の学生が直面している問題を問う質問と対象者の特性に関する質問を含む質問紙を用いた。看護学実習中の学生が直面している問題を問う質問は、問題の有無を問う選択回答式質問と問題が「ある」と回答した者にその具体的な問題を問う自由回答式質問により構成した。質問紙の内容的妥当性は学生および教員による検討会により確保した。

③データ収集方法：次の2段階に分けて行った。a. 第1段階：便宜的に抽出した看護系大学14校、短期大学1校、看護専門学校16校に所属する教員に研究協力を依頼し、合計1,882名の学生に質問紙を配布した。回収には、対象者が個別に投函する方法を用いた。また、分析過程にて、対象となる回答数が、一般化できる研究成果産出に必要なデータ数を下回る可能性があったため、b. を行った。b. 第2段階：便宜的に抽出した看護系大学1校、看護専門学校9校に所属する教員に研究協力を依頼し、合計409名の学生に質問紙を配布した。回収には、a. と同様に、対象者が個別に投函する方法を用いた。

④分析方法：Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析の方法（舟島、2010）を用い質的帰納的に分析した。

(2) 第2段階：「看護学生のための問題自己診断尺度—看護学実習用—」の開発

①質問項目の作成・尺度化とレイアウト：第1段階で解明した看護学実習中の学生が直面する問題を表す37カテゴリに基づき、40

質問項目を作成し、各項目を4段階リカート型により尺度化した。選択肢は「いつも直面している(4点)」から「全く直面していない(1点)」とし、得点が高いほど問題に直面する頻度が高く、より解決困難な問題状況に遭遇していることを示すよう尺度化した。

②尺度の内容的妥当性の検討：看護系大学あるいは看護専門学校に在籍し、かつ過去に看護学実習に取り組んだことのある学生11名の協力を得て、尺度の検討会を開催した。また、看護学実習の指導経験があり、実習中の学生が直面している問題を熟知している教員、豊富な尺度開発経験を持つ尺度開発の専門家など、複数の教員の協力を得て、尺度の検討会を開催した。

以上の尺度の検討会を経て修正した尺度を用いて、便宜的に抽出した看護系大学・短期大学・看護専門学校各1校に在籍する学生84名を対象にパイロットスタディを実施した。これらの結果に基づき、学生が回答しやすいように質問項目の表現を一部修正した。また、選択肢が適切に設定され、かつ識別力を持つことを確認した。

③全国調査

1次調査：「看護学生のための問題自己診断尺度—看護学実習用—」の信頼性・妥当性の検証を目的に調査を実施した。測定用具には、作成した尺度と特性調査紙を用いた。便宜的に抽出した看護系大学15校、短期大学1校、専門学校9校に在籍する学生1,069名に測定用具を配布した。回収には、対象者が個別に投函する方法を用いた。

2次調査：再テスト法による安定性の検証を目的に2度の調査を実施した。1次調査と同様の測定用具を用いた。便宜的標本である看護系大学8校、短期大学1校、専門学校5校に在籍する学生204名に測定用具を配布した。回収には、1次調査と同様に、対象者が個別に投函する方法を用いた。

③分析方法：尺度の信頼性・妥当性の検証に向け、内的整合性および安定性による信頼性、既知グループ技法による構成概念妥当性を検討した。

(3)第3段階：学習経験累積に伴う「看護学生が看護学実習に直面しやすい問題」の変化の解明

①分析対象：第1段階にて収集したデータとした。

②分析方法：第1段階の結果である37カテゴリを形成した記録単位を記述した学生から基礎看護学実習中の学生(以下、基礎群)と成人・老年・小児・母性・精神看護学実習中の学生(以下、領域別群)を抽出した。なお、2年課程の学生は、准看護師経験を持つことに起因し、3年課程の学生とは異なる問題に直面する可能性があるため、対象者から除外した。

次に、群毎に、各カテゴリの記録単位を記述した学生数、その数が各群の学生総数に占

める割合を算出した。また、割合の上位のカテゴリを基礎群・領域別群の「直面しやすい問題」として特定した。

(4)第4段階：青年期学生と成人期学生の実習中に「直面しやすい問題」の比較

①分析対象：第1段階にて収集したデータとした。

②分析方法：第1段階の結果である37カテゴリを形成した記録単位を記述した学生を29歳以下の学生(以下、青年期群)と30歳以上の学生(以下、成人期群)に分類した。なお、2年課程の学生は、准看護師経験を持つことに起因し、3年課程の学生とは異なる問題に直面する可能性があるため、第3段階と同様に、対象者から除外した。

次に、群毎に、それぞれの記述から得られた記録単位が各カテゴリに分類されていた数を集計し、その数が記録単位総数に示す割合を算出した。また、割合の上位のカテゴリを各群の「直面しやすい問題」として特定した。

【引用文献】

舟島なをみ：看護教育学研究—発見・創造・証明の過程—, 第2版, 223-261, 2010.

4. 研究成果

本研究の主な成果は、以下の5点である。

(1)第1段階：看護学実習中の学生が直面する問題の明確化

看護学実習中の学生が直面する問題を問う自由回答式質問に345名が回答した。345名の回答から得られた350記録単位を分析対象とした。質的帰納的に分析した結果、看護学実習中の学生が直面する問題37種類を解明した。

看護学実習中の学生が直面する問題37種類のうち、最も記録単位が多かったものは、

【知識量の乏しさと活用度の低さによるクライアント状態に応じた看護過程展開難航】であり、続いて【看護を学ぶ学習者としての素養の乏しさと欠落による自信喪失】、【実習グループメンバー間の協調的関係形成不全】の順であった。カテゴリ分類への一致率は、90%以上であり、看護学実習中の学生が直面する問題37種類が信頼性を確保していることを確認した。

(2)第2段階：「看護学生のための問題自己診断尺度—看護学実習用—」の開発

返送された質問紙553(回収率51.7%)のうち、全質問項目に回答のあった533部を分析対象とした。

①対象者の特性

対象者の年齢は18歳から45歳、平均21.2歳(SD=2.9)、在籍する看護基礎教育機関は、大学287名(53.8%)、短期大学38名(7.1%)、専門学校205名(38.5%)であった。

②尺度の得点分布

「看護学生のための問題自己診断尺度—看護学実習用—」の総得点は40点から144

点の範囲にあり、平均87.2点(SD=18.6)であった。

Kolmogorov-Smirnov の正規性検定の結果は、総得点が正規分布に従うことを示した($z=0.030$, $P=0.200$)。

③信頼性

a. 内的整合性：クロンバック α 信頼性係数は、0.936であった。これは、開発した尺度が内的整合性を確保していることを示した。

b. 安定性：再テスト法の結果、第1回、第2回ともに返送された質問紙は50部(回収率24.5%)であった。第1回調査と第2回調査の各総得点の相関係数は0.716であった。これは、開発した尺度が安定性を確保していることを示す。

④妥当性

a. 構成概念妥当性

既知グループ技法を用い、文献検討により設定した2仮説を検討した。2仮説とは、「受けた支援の量が少なくと感じている学生は、多いと感じている学生よりも解決困難な問題状況に遭遇している」、「実習目標達成度が低いと感じている学生は、高いと感じている学生よりも解決困難な問題状況に遭遇している」である。

t検定の結果、「もう少し支援を受けたかった」と感じている学生は、「十分支援を受けた」と感じている学生よりも総得点が高かった($t=-4.991$, $p<.001$)。また、一元配置分散分析の結果、実習目標を「あまり・ほとんど達成できていない」と感じている学生は「まあまあ達成できた」と感じている学生よりも、「まあまあ達成できた」と感じている学生は「十分達成できた」と感じている学生よりも総得点が高かった($F=36.722$, $p<.001$)。これらは、開発した尺度が構成概念妥当性を確保していることを示した。

⑤尺度の活用可能性

教員は、実習オリエンテーションの際などに、学生に「看護学生のための問題自己診断尺度—看護学実習用—」を紹介し、使用方法を説明しておく。

学生は、実際に実習に取り組み「何となく上手くいっていない」と感じた時、この尺度を用いた自己診断を行うことにより、自らがどのような問題に直面しているのかを理解でき、これらの問題が実習進行に影響していることを理解できる。また、これらの問題がなぜ生じているのか、どうすれば解決できるのかを考え、それを実施することを通して、問題を解決しながら、効果的に学習を進められるようになる。

(3)第3段階：学習経験累積に伴う「看護学生が看護学実習に直面しやすい問題」の変化の解明

基礎群の学生が最も「直面しやすい問題」は、【知識量の乏しさと活用度の低さによるクライアント状態に応じた看護過程展開難航】であった。続いて、【技術修得数の乏しさと熟練度の低さによる技術提供レベルの

不安定さと偏り】、【看護を学ぶ学習者としての素養の乏しさと欠落による自信喪失】の順であった。

領域別群の学生が最も「直面しやすい問題」は、【知識量の乏しさと活用度の低さによるクライアント状態に応じた看護過程展開難航】であった。続いて、【看護を学ぶ学習者としての素養の乏しさと欠落による自信喪失】、【指導者への指導要請不可による行動目標達成難航】の順であった。

これらは、学生が、学習経験の累積に伴い、直面する問題に直面しやすくなる可能性を示した。

(4)第4段階：青年期学生と成人期学生の実習中に「直面しやすい問題」の比較

青年期群の学生が最も「直面しやすい問題」は、【知識量の乏しさと活用度の低さによるクライアント状態に応じた看護過程展開難航】であった。続いて、【看護を学ぶ学習者としての素養の乏しさと欠落による自信喪失】、【指導者への指導要請不可による行動目標達成難航】の順であった。

成人期群の学生が最も「直面しやすい問題」は、【不適確な指導による指導者との相互行為諦念と厭悪】であった。続いて、【看護を学ぶ学習者としての素養の乏しさと欠落による自信喪失】、【実習グループメンバー間の協調的関係形成不全】の順であった。

これらは、青年期群と成人期群の「直面しやすい問題」が異なる構造を持つことを示した。

(5) 今後の展望

看護学実習中に学生が直面する「問題」と「学習状況」の関連を統計的に解明し、これらの結果を基に「直面する問題」とその時の「解決の方向性」の記述を行い、「看護学実習における自律的学習推進システム」として統合する。

看護学実習は、学生の看護実践能力の修得に向けて不可欠な授業である。その一方、この看護学実習に取り組む学生は、37種類もの多様な問題に直面している現状がある。

「看護学実習における自律的学習推進システム」は、学生が直面する「問題」とその解決の方向性を見だし、学習を改善していくことに活用可能である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

①山下暢子、舟島なをみ、中山登志子、看護学実習中の学生が直面する問題—学生の能動的学修の支援に向けて—、看護教育学研究、Vol.27、No.1、2018、pp51-65、DOI: https://doi.org/10.19015/jasne.27.1_51

〔学会発表〕(計4件)

①山下暢子、舟島なをみ、中山登志子、「看護学生のための問題自己診断尺度—看護学実習用—」の開発(信頼性・妥当性の検証)、

第 37 回日本看護科学学会学術集会、2017 年 12 月 16 日、仙台国際センター、(宮城県)

② 山下暢子、中山登志子、青年期学生と成人期学生の実習中に「直面しやすい問題」の比較 効果的な実習指導の展開に向けて、第 36 回日本看護科学学会学術集会、2016 年 12 月 11 日、東京国際フォーラム、(東京都)

③ 山下暢子、中山登志子、学習経験累積に伴う「看護学生が実習中に直面しやすい問題」の変化 学習進度による比較を通して、第 35 回日本看護科学学会学術集会、2015 年 12 月 6 日、広島アステールプラザ、(広島県)

④ 山下暢子、中山登志子、看護学実習中の学生が直面する問題の解明、日本看護教育学会 25 周年記念大会、2015 年 8 月 29 日、前橋市民文化会館、(群馬県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山下 暢子 (YAMASHITA Nobuko)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部・
教授
研究者番号：30279632

(2) 研究分担者

舟島 なをみ (FUNASHIMA Naomi)
新潟県立看護大学・看護学研究科・教授
研究者番号：00229098

中山 登志子 (NAKAYAMA Toshiko)
千葉大学大学院・看護学研究科・教授
研究者番号：60415560